
借金 = 極楽！？

マイルー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

借金Ⅱ極楽!?

【Nコード】

N5745Z

【作者名】

マイルー

【あらすじ】

複雑な事情で借金2億を背負うことになった、今年高校3年生の学生、五十嵐努。

その複雑な家庭事情は、父がとても遊び人で、しかも金使いが荒く、拳句の果てには、交通事故でなくなってしまい、母と息子を残して他界。

母は一生懸命働いたが、返せる金額ではないので、息子一人残して

逃亡。

今年大学受験が控えているのに、借金を残されたまま父に先たたれ、母に逃げられ。

本人曰く「人生は山があるほど面白い」と、ポジティブシンキングある。

五十嵐努は、この最悪の事態から挽回することができるのだろうか？

全力疾走！！！！（前書き）

借金2億を背負った学生ってほんとにいますかね？？
もしいたら本当に悲惨なものです・・・。
いないと思いますがいたら・・・すみません。

全力疾走!!!

今宵はクリスマス、ところどころにイルミネーションがとてもキレイな街になっている。

恋人同士もそれを見て、「うわ〜きれい!」「ステキ」とか言っている。

街中にはサンタの格好をしている人がケーキを売っていたり、七面鳥を売っていたり、シャンパンなど・・・。

ようするに、金持ちが食べるもの。

貧乏人にはクリスマスは過ぎすなと言ってるようなものである。

俺は今年受験シーズン、勉強しなきゃならないのに遊んでばかりいる。

というか、遊びを開放してくれない。

「おごっつこ」という遊びに・・・。

「までええー!!!クソガキ!!!体の一部どっかおいてけや!」

「勘弁してください!!!クリスマスプレゼントはムリです!!!」

「だったら今すぐ止まれええ!!!」

「だったら追いかけるのやめてくださいよ!!!」

といった具合のおごっつこ。

まさにリアルおごっつこである。

つかまったら、当然食われる、

全力疾走！！！（後書き）

まあ大体こんな感じで話を進めて行きたいと思います！
みなさんこれからもよろしくお願いします！！

補習授業

12月25日の午前6時。

あまりにも寒すぎて目を覚ましてしまった。

冬の寒さはバカにならないもので、凍死にならないように10分寝ては起きてまた寝ての繰り返しだ。

クリスマスだというのに今日は学校の補習がある、まあ自分が悪いのだが……。

だがしかし学校はすこしは暖かいだろうから、俺的には嬉しい非難場所だ。

「しかし……クリスマスに俺一人で補習か……。」

学校側では俺が2億の借金を抱えていることなんか知らない。

嬉しいことに父が、「どうせこんなに借金があるから学校へのこれからの出費を全部払おう」

この一言で学校の出費がかからないわけだが……。

「学校にだれもないから……弁当はだれも持ってないか……。」

俺は食費に関してはすべて、学校の水道水、他人の弁当で生活している。

いい加減友達の目が痛い……。

ちなみに俺の服装は、制服にマフラー・・・これしか持っていない。おかげでとてもボロボロだ・・・。

俺はトボトボと学校に向かった、ここから徒歩1時間30分ぐらいで到着するから丁度いい。

そして学校に着き、教室に入っていく。ちなみに俺は3年6組だ。

「・・・誰かいる？」

そこには、一人の生徒がいた。

俺とは違いなんかのオーラを放っていた。

「あ。あの・・・おはよう・・・。」

「ん？ああ、おはよう。」

その生徒は女の子で、髪は短く、背は150ぐらい？雪みたいな透き通った肌、瞳は吸い込まれそうだった。

そしてほんのすこしいニオイがした。

「え、えつと、キミはここの生徒じゃないよね・・・？」

「人数が少ないから、まとめてやるらしいよ、最も今日はキミと私だけだね。」

・・・二人きり??

これはフラグがたったか? そんな期待を持ってみたがそうでもなかった。

「・・・キミ少し臭うね。」

女の子は鼻をつまみ、とてもイヤな目で見ていた。

「悪いけど、席はすこし離れて座って。」

・・・見た目の割りには、ずいぶんとストレートに来る・・・。
心に大きな傷が・・・。

「キミって大バカだからクリスマスに補習に来たの・・・?」

この子は、全力投球で痛いところを・・・。
しかも顔がマジだし・・・。

「お、お前だって、バカだから・・・。」

「キミと一緒にしないでくれるかな?」

マジメな顔で俺の言葉をさいぎった。
そんなに俺の一緒じゃイヤか・・・！？
泣きたい・・・。

「私は自主的に来てるんだよ。」

「・・・彼氏がなくて、友達がない寂しい人ですか？」

「・・・本気で言ってる？だとしたら本気で救えないバカだね。」

・・・冗談が通じないらしい・・・。
しかも睨む顔がちょっと怖かった。

「私は2億男を追ってるんだよ。」

2億・・・どっかで聞いたことがあるような・・・とういつか俺だ。

「へ、へえ〜そ、それで？」

「私の父が借金取りやってるから、その手伝い。」

ま、まさか、あの・・・ホモ借金取りの娘！？

「その男は学生でね・・・本当に許せない・・・あれ？どこ行くの？」

「……ちょっと母が子供生まれるって……。」

「なんでわかったの？」

「テレパシー」

「そうか……キミが2億の借金男……五十嵐努君だね……。」

「ば、ばれた！？なんで分かったんだ！！」

「こいつもテレパシーを！？」

「本当にバカだね……舐めてる様にしか見えないよ。」

「第2幕のおにごっこスタート！！」

補習授業（後書き）

いわゆる修羅場ですかね？

男と女の微笑ましいおどろっっ

3年6組・・・教室内。今非常に重い空気が流れている。
補習の生徒かと思いきや、借金取りの娘だったのだ。

ここから逃げることは可能だけど、全力で逃げてしまうと男の名が
すたると言うもの。

相手は人間、しかも女の子、話し合えば今日は見逃してもらえるか
も・・・!

「さあ、早く2億返してよ。」

「そんな簡単に返せって言われても、俺はまだ学生だ！すぐに返せ
るわけないだろ!!」

「言っちゃった・・・!!」

男らしく!!これで女の子もすこしは怯み、考えも直してくれるだ
ろう。

まったく・・・キミとは借金のない状態で会いたかったよ・・・。

「・・・たしかにそうだね。」

彼女はすこし俯いたまま、ずっと考えこんでいた。

しばらくすると彼女はなにか閃いた表情でこちらを再び見た。

「ひとつだけ方法があるね。」

「え、ホント！？じゃあ今すぐその方法を教えてくれ！」

彼女はこちらみながらキラキラしたような笑顔で、決して冗談なんか微塵もない笑顔で。

「人身売買」

冗談であつてほしかった……でも冗談なんてついてない顔をしていた……。

大体予測はしてたけどさ……。人間って最後まで希望を持つじゃない……。希望が絶望に変わる瞬間ってとても悲しいんだよね……。

「ばいばい」

俺はその一言を残し、全力で逃亡！！

しかし彼女は全力で逃げている俺を全力で追いかける！！

1階に行つては2階、2階に行つては1階、ずっとその繰り返しだ。

「ガツチャン」

??なんだろ・・・この機械音みたいな音・・・なんか渋い音だ。
これは俺が大好きな音・・・どっかで聞いたようないい音だ・・・

バキユン

・・・拳銃だった。

男の子ならだれも憧れる、黒光りをしていてとてもカッコいい形。
弾が下に落ちた音なんてもう最高だ・・・。
ちなみに俺はエアガンなら持つてる。

16

「ええええーーーー！！！！！！」

「次は当てるよ。」

「先生えーーーーー110番して！！銃刀法違反してる女の子がいる
！！」

そんな必死に声を出してることに気づかず、学校の校舎には俺の

声が響いていた。

これは死亡フラグですか・・・？

だれか教えてください・・・

俺は走るのをやめ、おとなしくつかまった。

「素直でいい子だね。」

「・・・はい。」

俺は自然に彼女の前で正座をしていた。

もう男のプライドはどうでもういい！！

命があれば・・・。

「人身売買以外にもひとつ選択肢があるよ。」

俺が喜びに満ちた顔でもう一つの選択肢を聞くと。

「うーんと、確かお父さんにつれて来てって言われたような・・・。」

「

どっちも最悪な選択だった。。。
俺に出された選択肢とは

- ・ 人身売買を引き受ける。
- ・ ホモも親父に突き出される。

究極の選択だった。。。

俺は耐え切れず、不覚にも涙がちよつと出てきた。

「でも。。まあ、家庭事情で借金だなんてねえ。。可愛そうかもね。。。」

彼女が少し哀れむような顔で俺を見ていた。。。

俺はひたすら下を向くしかない。

そしてしばらくした後、彼女は思いついたような声で俺に話しをかけた。

「キミ、私の道具にならない？」

。。。。道具？

それはどついつ意味だろうか。。。。？

しかし戸惑ってるヒマはない！！

「僕は、あなたの一生道具になります・・・。」

「決断が早いね、道具なんだからキミは私の役に立ってもらおうからね。」

あ・・・なんだそういう道具か・・・。

なんか残念な気持ち・・・

ていうか、俺はどういう道具を想像してたんだ？

「一回役に立つようなことをしたら100万、いいね？」

「ひゃ、100万!!!？」

「まあ値段もあるから、リスクが相当伴うけどね・・・。」

「いい!!!!いい!!!!もおう火の中、水の中!!!!」

「壊れたら捨てるからね、せいぜい壊れないように。」

壊れる・・・？

俺はどんなことをさせられるんだろうか・・・。

とても不安だが生きる希望の光が微かに見える！！
今日は最高のクリスマスだ！！！！

「あ、あの〜ちなみにお名前は・・・？」

「私は大神伊吹、よろしくね、五十嵐君。」

彼女は・・・大神伊吹は笑顔でそう答えた。

彼女の笑顔はあまりにも輝かしくて、不のオーラが纏まりついてる
俺とは全然違った。

「間違えた・・・道具君かな。」

彼女は恐らくドS、だって笑顔で道具だもんね。

この日クリスマス・・・生きる希望の代わりに人権が初めてなくな
った瞬間だった。

虫退治

12月26日午前6時すぎ前、俺はいつものように野宿をしていた。今日も凍死しなくて済んだ、毎日が命がけの寝泊りでスリル満点だぜ。。。。

たまには暖かい布団で朝を迎えたいものだよ。

とは言っても。。。。全部の家具に差し押さえシールが張っており、当然家にも入ってある。

帰る家すらないわけだ。。。。
すると突然。

『ピピピピ。。。。ピピピピ。。。。』

俺の右ポケットから携帯の着信音があった。

ちなみにこの携帯は俺のではない、彼女。。『大神伊吹』からの預かり物で携帯を一台預けられているのだ。

なぜなら俺は12月25日、借金取りの娘『大神伊吹』に学校で追い込まれ、彼女の情けで俺は彼女の道具になったのだ。

一回の仕事で100万、その金額の多さ故にリスクもかなりあるものだ。

まあ。。。。あのまま彼女の道具になんなかったら人身売買されてたしな。。。。

『……』

俺はしぶしぶと彼女からコールに出た。

すると彼女は、不機嫌そうな声で第一声を発した。

「出るのが遅すぎ……使えない道具は捨てるか、壊すよ?」

「……どうか壊すのだけは勘弁してください! 何の用だ?」

まったく第一声があんな恐ろしい言葉だとチビってしまったよ……。
あと少しでチビルところだった……。
用ってなんなんだろうか?

22

「うん……用はキミのところに行ってから話すよ。」

「俺の居場所が分かるのか?」

「キミの体内に発信機つけたから大丈夫。」

……いやいや、大丈夫じゃねえよ……体内ってどこスパイだよ。

とうとうかそれは犯罪だろ、人してやっちゃいけないよ。

ていうか何時付けた……!?

「忘れたの？キミは道具なんだから人権なんかないんだよ、道具をどう改造したって問題はないよ。」

「……うん、そうんだけど……マジな声で言われるとても悲しい気分になる。」

「一応俺は人間なんだけど、でも道具。」

「悲しい人生だなあ……でも輝かしい光を掴むまで俺はあきらめない！！」

「じゃあ、すぐに行くから待ってて。」

それから30分、彼女はちっとも急ぎもしなくてマイペースに俺の居場所に到着した。

世間では、30分をすぐには言わない。

というかコイツ絶対ワザとゆっくり着やがった。

「おまたせ。」

「……おせえよ……で、何の用だ？」

「私の部屋にゴキブリが出たから退治して。」

「……ゴキブリ??」

ただそれだけのことで??やばい笑いの壺が・・・!!
噴出しそう・・・!!

俺は精一杯我慢したけど、それもむなしく噴出した。

「・・・ぶっ・・・く・・・プフ!!ただそれだけで・・・!!可愛
いところもあるじゃない!!」
「・・・」

お腹の辺りに冷たい感触した・・・お腹の辺りを見てみると・・・黒
い塊。

それは拳銃。

俺は一瞬で笑みが消え、彼女のほうを見ると薄ぼんやり笑みができ
ていた。

「ゴキブリを退治してくれるかな・・・?」

「も・・・もちろんです!おのれ!!ゴキブリめ、女の子の部屋に
侵入するとは許せん!!」

「私は害虫は大嫌いで見ただけで虫唾が走るんだよね・・・、だか
ら汚い男なんて見ると・・・」

その瞬間・・・バキユンと一発俺の後ろにある木に命中。
木には風穴が開いていた。

俺は今、冷や汗が止まらない。
そしてすこしちびってしまった。

「撃ち殺したくなるんだよね……。」

「は……はは……害虫退治が終わったら、せ……銭湯に行きたい
と思います……。」

「うん、そうしてくれると嬉しいよ。」

そしてしばらくの沈黙が続いたまま彼女の家まで歩き、約10分
彼女の家についたらしい。

その家は2階建てで、彼女の部屋は2階にあるらしい。
俺は玄関からじゃなく、2期からハシゴで彼女の部屋にお邪魔した。

「へえ……ここが女の子の家……。」

その部屋はシンプルでテレビとソファアがあり、壁紙も普通で本棚
に少しの本がおいてあるぐらいだった。

なんか想像していたのとちがい、夢がすこし壊れたような気がした。

「そのクローゼットのすみに……。」

「新聞紙は？」

「手で潰して。」

「……道具の気持ちがおしは分かったような気がした……。彼女は本気で言ってるらしく、早く退治しろみたいな目で見ている。」

「……勘弁してください。」

「ダメ。」

そんな会話をしている内にゴキブリがクローゼットのすみから出てきて、ハネを広げてとんだのだ。

その気持ち悪さは想像絶する。

跳んできたゴキブリは俺の頭に止まり、俺は少しの間動くことはできなかつた。

「キヤアアアーーーー！！！！」

「お、おい落ち着け！！！！銃を下ろせ！！！！」

俺の必死の説得は通じず、かまわずバンバン撃ってくる。

俺は戦争の気分を味わった。

もうゴキブリどころの話ではない・・・。
俺は必死に逃げ回った・・・、運よく当たらなかったが、部屋はボロボロ。

「ハアハア・・・！！！！！！」

「ががががが・・・！！！！！！！！！！」

俺は少し落ち着いてあとでこう叫んだ。

「死ぬところだったろ！！！！！！！！！！」

「ゴキブリは逃げたようだね・・・よかった・・・。」

「よくない！！！！」

彼女の目には涙がすこし溜まっており、いわゆる半泣き状態。
泣いたところも、また可愛いと思う。

「まあ・・・今回の仕事はよくやったよ。」

「お前がほとんどだけだな。」

「約束とうり100万、借金から引いておくよ。」

残りの借金残高 1億9,900万。

人生山ばかり

人間にはなんで寒さを凌ぐ毛がないのだろうか？

そうすればだれも凍死しなくて住むのに……寒さのおかげで頭が変になってしまった俺がいた。

多分血液が半分凍ってるのでは？みたいな体の麻痺感……なんと
いうか逆に寒くない。

というか……なんか気持ちよく眠くなってきた、マッチ売りの少女もこんな気持ちだったのかな……。

……凍死フラグが立った、やばい今の状況を回復しないと。

「……うん？なんだあれ？」

道端に落ちている紙くずを拾ってみると、温泉チケットだった。

人生は山ばかりじゃなかったらしい。神様の贈り物だ、大切に使用せてもらおう！

~~~~~

「ああ………うつ……おおおお………」

体もスッキリ洗って体もキレイになり、ボサボサだった髪の毛もキレイな髪質になった。

そして最後に湯船つまり、今呻き声を出している。

「体が溶けていく・・・まるで凍った氷すこしずつ溶けていくみたいに・・・。」

まさに今そんな感じだ、本当に指の一本一本から疲れが抜けていきなんともいえない気持ちだ・・・。

・・・こんな日が毎日続いたらどんなに幸せか。そんなことを考えていたら。

「あんちゃん、携帯なってるよ。」

ホントに人がくつろいでる時に電話をかけてくる人だ・・・。  
もしかして狙ってるのか？

だとしたら・・・なんて言おうとしたんだっけ？

俺はしょうがなく、湯船から出て電話に出た。

「なんだよ。」

「お風呂に入ってたんだね、感心感心。」

「用がないなら切るぞ。」

「用があつて電話したんだよ、キミはやっぱりバカだね。」

・・・正論言われてなんにも口が出せない俺がここにいた。  
なんともみじめな姿だ・・・。  
パンツ一丁だし。

「じゃ、いつもの場所で。」

この一言を発した瞬間、電話は切れた。  
発信時間は7秒・・・なんともいえない。

~~~~~

俺は汚れた制服も着て、いつも公園に向かった。
せっかく体も洗ったのに・・・銭湯に行った意味があんまりない。

公園の行く途中の道を歩いていると、ピンクのパンツが落ちていた。変態はここで持ち帰るところだが、俺はそうじゃない。けど手にとってしまった。悲しい男の性なのか？

「・・・・・・・・」

俺がパンツを握り締めている状態で、前にいる女の子と出くわした。彼女は見た目は、小柄で髪はすこし茶色がかった色。そして瞳は大きくとても純粋な目をしていた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

気まずい空気が流れ、しばらくすると彼女はわなわな震えていた。

「あ・あ・・・・・・・・」

「いや・・・・・・・・これは・・・ちがうんだけど・・・違うない」

「キヤーー！！だれか来て！！パンツ握り締めた変態男がいます！

！！」

「デカイ声だすな!!!」

数分後、彼女の声を聞いた一般人が警察に通報。すぐに警察が来て事情徴収をされた。

疑いはすぐにはれたが、俺の気分は晴れない。

「す、すいません!! 誤解してました!」

「・・・まあ疑いは晴れたからいいよ、俺急いでるから。」

「な、なにかお詫びをさせてください。」

「いいよ、いいよ、めんどくさいから。」

彼女は納得ができていない顔でムーと考えた。

そして彼女はなにかを思いついたような声で話しかけて来た。

「服がボロボロですね、クリーニングでお詫びします。」

「え、そんないいよ!」

「私の気がすみません! ぜひ!」

彼女は強引に俺の腕を掴むと、クリーニング屋に連れてこられた。強引な女の子もいいんあ〜と少し俺は思ってしまった。なに考えてんだ!!!俺は!

「はい、これは変わりの服です。」

いつ持ってきたんだろうか・・・？
不思議な事もあるものだ。

「クリーニングが終わるまで2日、3日時間がかかるので携帯のアドレス教えてもらえます？」

これは俺の携帯じゃないけど・・・まあいいか。
ほとんど俺のみたいなものだしね！
服もキレイになってとても気分がいい！！

「分かった、名前はなんていうの？」

「島村巫女といいます。」

「俺は、五十嵐努ね。」

軽く自己紹介が終えてアドレス交換、なんか今年は出会いが多いなあ～～！

もしかしたらもしかするかも！！

「では、出来上がりでしたらメールします。」

そう言って彼女は店を後にした。

なんか忘れてるような気がするけどな・・・??

苦勞人

『ピピピピ・・・ピピピピ・・・』

あの騒動から少ししてから、再び呼び出しコールがなった。
なにか忘れてると思ったたら・・・大神伊吹のことか。
最初の呼び出しから何分たったけ？

たしか公園で待ち合わせの約束をして・・・あれからゴチャゴチャ
してたからな・・・。
軽く1時間は待たせてるかも・・・。
俺は冷や汗が一気に出てきて呼び出しコールに出た。

「・・・はい。」

「ごんだけ待たせるのかな？」

大神の声はドス黒いオーラに包まれているような声をしていた。
そして、銃をいじる音も聞こえてきた。

多分・・・オシオキを食らうだろう・・・というか絶対にどこか撃た
れる。

「1秒、1秒キミは自分の命を捨ててることが分らないのかな？」

「すぐ向かいますので、言い訳の時間をください。」

「一応聞いてあげるけど、期待はしないほうがいいかもね。」

そしてすぐに電話は切れ、呆然と立ってる俺がいた。
行っても地獄、行かなくても地獄。
とりあはず行かないとな！助かるかもしれないし！
・・・助かるといいな〜。

「はい、手を頭の上ののせて正座。」

俺が公園についた瞬間、銃を突きつけられ従うしかない俺。
そして俺はよく冷えた地面に正座をさせられ、半泣き状態。

「死刑囚：五十嵐努、最後の言い訳を聞いてあげましょう。」
「え！？ちょ、ちよっと！タンマ！」
「私は言い訳を聞いてるんだよ、わかんないの？」

マジメな顔＋ドス黒い笑顔＝悪魔

真面目に泣きそうだ・・・、と、とりあはず言い訳を。

「簡潔に正直に言いなさい、そうすれば地獄に行っても罪は軽いでしょう。」

「パ、パンツ拾ったら遅れました。」

「うんうん、まとめるとキミはここに来る途中パンツが落ちてたから拾って元の場所に返そうとしたら

そこには女の子が偶然そこにおいて誤解した彼女が大声を出して110、警察が来て事情を説明、誤解は晴れて

よかったけど彼女がどうしてもお詫びがしたいと言うので制服をクリーニングに出してもらって

今の白いジャージを着て、今にいたるわけだね？」

長い説明有難うございます、大神さん。

俺の正座してる横に3つの穴が開いてるけど・・・。

本当に死ぬかと思った・・・！生きてるのが不思議だ・・・。

神様って本当にいるんだなあ・・・！

「なんでキミは誤解するよ様な言い訳したのかわからないよ。」

「自分でも不思議。」

今は心臓の鼓動が普通の人に4倍は早いと思う。
大神は銃をしまい、何事もなかったように話かける。

「まあ・・・キレイな格好になってるから今回はゆるしてあげるよ。」
「も、もし汚い格好だったら・・・？」

彼女はドス黒い笑顔オーラを出しながら俺のおでこに指一本当てて、
こう一言いった。

「確実に頭をぶち抜いていたね。」

神様・・・今日はこんな俺をお守りくださりまして有難うございました。
これからもお守りください。

物置小屋

「……で俺を何で呼んだだよ？」

これだけの恐怖与えられてくだらないことだったら、今度は俺が恐怖を与えてやる！

……多分ムリだろうけど。

ていつかなんで銃を普通に撃ってんだろう？だれも気づかないのか？

「ああ、用というのはキミに物置小屋を貸してあげるよ。」

物置小屋……それは使わなくなったものをしまっ収納スペース。寒さはあんまり外とは変わらないが、雨風は大体防げて荷物を無傷で収納できる万能の収納アイテムだ。

「石油ストーブと使わなくなった毛布があるはずだから凍死は多分しないと思うけど。」

ストーブ＋毛布＝暖かい朝、凍死とは無縁の世界。
それに小屋はある程度密封されているはずなので、ストーブ暖かい
空気で部屋に籠り全然寒くない。
ただし、2時間に一回は細目の換気を忘れずに。

「マ、マジですかあ！！！」

「うん、キミの場合、年が越せるか分からないからね。」

初めてコイツの優しさを実感した……。
今まで、悪魔のような行動で本当につらかったからな……。
今まで頑張ってきてよかった……。
そしてコイツに出会えたことで命の寿命が延びた！

「うう……。俺はお前に出会えて本当によかった……。」
「な、泣きながらそんなこと言わないでくれないかな？気持ち悪い
から。」

大神は外が寒いせいかわからないけど、顔がほんのり赤くなっ
ていた。

というか、感謝の気持ちをこめて言ったのに気持ち悪い……。

天使か悪魔か分からないヤツだな、まったく。

「取りあはず、その小屋に案内してあげるからついてきて。」

俺は言われた通り、大神について行った。

小屋に着くまで俺と大神はなんにも喋らなかったが、大神は下を向きながらブツブツなにか唱えていた。

・・・まさかぜ キじゃないだろうな・・・？
でもコイツならありえるな。

そして数分後、大神の言っていた小屋についた。

その小屋は表面は多少ボロボロだが、中に入ってみるとそれなりに広く人が暮らせそうな設備は整っていた。
でも少々ホコリっぽい。

物置小屋というだけあって色々なものがゴチャゴチャしていた。

「ここがキミの新居だよ、大切に使ってね。」

「おお！ありがとう！お前のおかげでなんとか年は越せそうだよ！
借金返せず、死んでしまっただけは困るからね。」

「・・・ま、まあ、とりあはずありがとう！お前、本当は優しい人なんだな。」

俺がお礼を言つと少し照れくさそうに、俺の目を背き少し横を向いていた。

普通にすれば、可愛いだけと喋ったら恐ろしい。

「その小屋にはだれも来ないはずだよ、元々お父さんのだから。」

「……お父さんのと言つことは、ホモ親父がここに来る可能性があるということか……。」

今は最悪の状況は考えないことにしよう。

取りあはず今は喜ぼう!!

「それじゃあ用があつたら連絡するから、それまでに体を休めておいて。」

「おう、本当にありがとな!」

お礼の言葉を言つと彼女はここを後にした。

ここが今日から俺の家、凍死の心配はなくなつたわけだ!!

人生ここからだ！

すばらしい朝

12月28日の朝、俺は気持ちよく起きた。

いつもは半分凍った状態で起きるのだが、今日はそれが無い。

こんな気持ちいい起き方をしたのは何年ぶりだろうか……。

俺は、みんなが当たり前前の朝をようやく迎えることができた。

今の時刻は9時すぎ、いつまでも寝ていても体に悪いからそろそろ起きるか。

それにしても気持ちいい朝だ！これもアイツのおかげだな！

「それにしても色々ごちゃごちゃしてるな……使えそうな物があるか探してみるか。」

ここは物置小屋、なにかしら使えるものがあるだろう。

俺は色々と物色しているとなにかの本が見つかった、それを手にしてみると。

・・・これは誰のだ？？

まさか大神が？そんなわけないと思うが・・・。

そつえば・・・クリスマスの時、大神の親父に追いかけてい
る時に変なこと言われたような・・・。

・・・考えれば考えるほど恐ろしくなる。

一応、大神にはこのことを聞いておこうかな。

俺はその本を元の場所に戻すと、また物色し始めた。

なかなか使える道具がないな・・・。

そろそろやめるか・・・。

そう思った時に俺の視界に箱に『大神伊吹の思い出』と書いてある
大きな箱を見つけた。

思い出か・・・俺には苦い思い出しかないからな・・・。

どんな思い出が詰まってんだろ・・・。

箱に手をかけた瞬間、タイミングよく呼び出しコールが！

俺はびっくりしながらコールに出た。

「おはよう、いい朝を迎えられた？」

「ああ、おかげ様でな。」

「それはよかった……、ひとつ忠告なんだけどね……。」

忠告？

なんかすごい怖くなってきた……。

「物置小屋に『大神伊吹の思い出』という箱をみつけても開けちゃダメだよ。」

ダウト！今俺の目の前にある箱だな。
早く開けたくてウズウズしています。

「開けたら……まあ大体は分かるはずだね。」

……声で分かった。

ドス黒いオーラの声で分かった。

開けたら最後だということが分かった。

「……分かりました。」
「それじゃあ、いい物置小屋生活を。」

そして電話が切れた。
まあ……開けるなど言われても目の前にあるわけだし……。
人間の理性が耐えられるはずもなく、禁断の箱を開けた。

『日記帳』、『幼い頃の写真』、『幼い頃に衣服』、『玩具』、
『キリンの人形』

……まあ、思い出らしい思い出だ。
小さいころの写真も邪のカケラもなく可愛らしく写ってるし。
なんとなく今の面影も残ってる。

俺が気になるのはこの『日記帳』だ！
一体なにが……。

そこに書かれていたことは……まったくなかった。
どのページも真っ白。

……なんだつまないな。

最後のページだけなにか書いてある……！

なになに……？

『これはダミーの日記』

……偽者……なんのために？

アイツバカじゃないの？

わけの分からないことをやるヤツだ……。

俺は箱を元の場所に戻し、その場に座った。

その瞬間、呼び出しコールがなった。

なんだよ……見てみると呼び出しコールではない、ただのメール
だった。

島村巫女

件名：出来上がりました

本文内容

クリーニングが出来上がりました。
今、これですか？

どうやらクリーニングが終了したらしい。
どれヒマだし取りにいくか。

一発返済！？

島村巫女からの提案で、俺の通ってる学校に待ち合わせを約束した。だから俺は待ち合わせの学校に向かっている途中である。

物置小屋から学校の距離はそんなに遠くはなく徒歩10分で着く距離だ。

俺は歩いてる途中にあるものに目を疑った。

それはとんでもない大きさの屋敷である。

なんじゃこりゃ・・・本当にこんな宮殿みたいなものがこの世に存在するのか・・・。

その屋敷の広さは・・・とにかくデカイ、それしか言えない。

「映画の中だけかと思ってたよ・・・」

つい一人事がもれてしまい、ちょっと恥かしい気分になる。

とりあはず待たせてるから早く行かないと！

「悪い、待たしちまって！」
「いいですよ、それより出来上がりましたよ！」

彼女の手にはクリーニングされたキレイな俺の制服を持っていた。
本来、キレイにすればこんな色がでるんだな・・・。

「意外に早くできました！はい、どうぞ。」
「お、おお！サンキュー」

キレイな制服を渡されて早速着てみたい衝動が出たが、ガマンだ！
彼女もなんか嬉しそうだし。

「五十嵐先輩、ここの学校ですよね？」
「え、ああ、そうだよ。」
「実は私もここの生徒なんです！」

驚いた！そうだったのか！
たしかに、ちよくちよく見たことはあるけど思い出せなかった・・・。

なんか思い出せなくて悪いことしたかもなあ……。

「先輩のことはよく聞きますよ、借金を背負ってるとか。」
「え……ま、まあ……少しね……。」

なに嘘ついてんだ!!!俺!
ちよつとの額じゃないだろ!ジョークが通じない額だろ!
億単位なんて、幼稚園の子がよく言う言葉だよ!?
なに見栄はってんだ!

「いくら背負ってるんですか?」
「……。」
「教えてください。」
「……。」
「先輩の力になりたいんです!」
「……ほ、ほんの2億……かな。」

多分、彼女はドン引きするだろうな……。
だって2億だもん。
最初は信じないかもしれない……。

2億の借金なんて普通じゃあ、できないし。
俺、普通じゃない人と見られてるんだろうな……。

「2億？意外に少ないですね。」

「だよ〜……って……へ？」

「2億くらいなら払えばいいじゃないですか？」

2億が少ない……？

普通は払えないからね……。

もしかして数字が分からない人？

「もしよかったら肩代わりしましょうか？」

「……うん？」

「2億くらいなら普通に払えますので。」

この子……頭どつかで打ったのかな？

おかしを買いますっていうノリで言ってるけど……2億だよ？

「その代わりに条件が一つあります。」

「……状況が飲み込めないんですけど。」

「いいから黙って聞いてください。」

彼女が一言そういうと、彼女は大きな深呼吸を2回ほど。

そして決意を固めたかのように、マジメな顔になりながらも顔をすこしほんのり赤い表情。

「2億を払う代わりに私と付き合ってくださいっ!」

俺の頭の中がシステムエラー。

状況が飲めない……。

なにが起きている?? だれか現状を説明できるものは?

いないのか? 誰かいないのか!?

「じ、実は私、先輩を学校で見たときから……、一目惚れとういうやつです!」

「……あ、ああ……そ・それで??」

「最初あった時はちょ、ちよつと気が動揺してしまい……。」
「……ん、ああ……。」
「わざと叫んで『きっかけ』を作ったんです！それで自分の思いを
今まで殺してました！」

返事はしてるけど……ほとんど頭に入ってこない……。
彼女が俺のことが好きで？？

2億は彼女が払う……？

……わけが分からん!!!!!!!!!!!!!!

「ど、どうでしょうか……？私の気持ち伝わったでしょうか……？」

「す、すこし混乱してるけど……つ、伝わった」

「この条件で私とお付き合いして頂けませんでしょうか……？？」

……彼女が2億を払う代わりに俺が彼女と付き合いつ。

彼女は俺のことが好き。

俺はデメリットがない、あるのは彼女。

今すべてがつかなくなった……。

これって……めっちゃ得じゃん……！

可愛い女の子と付き合えて、それに借金ともおさらば……。

「やっぱり・・・私ではダメでしょうか・・・。」
「い、いや!!俺としても借金が消えて嬉しいし、そ、それにこんな可愛い子と付き合えるなんて。」

すると彼女はパアッと明るくなり、とても嬉しそうな顔でこう言った。

「で、では・・・と付き合ってくれらるということですか?」
「う、うん、よ、よろしくおねがいます・・・。」

自分でも分かる・・・顔がとても真っ赤だ!!
まるでトマトみたいに!!

「・・・あう・・・。」

時間はゆっくり流れ、沈黙がひたすら続いた。
でもそれはイヤな沈黙ではない。
なんとも言えない・・・沈黙だけが続いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5745z/>

借金 = 極楽！？

2011年12月28日02時48分発行